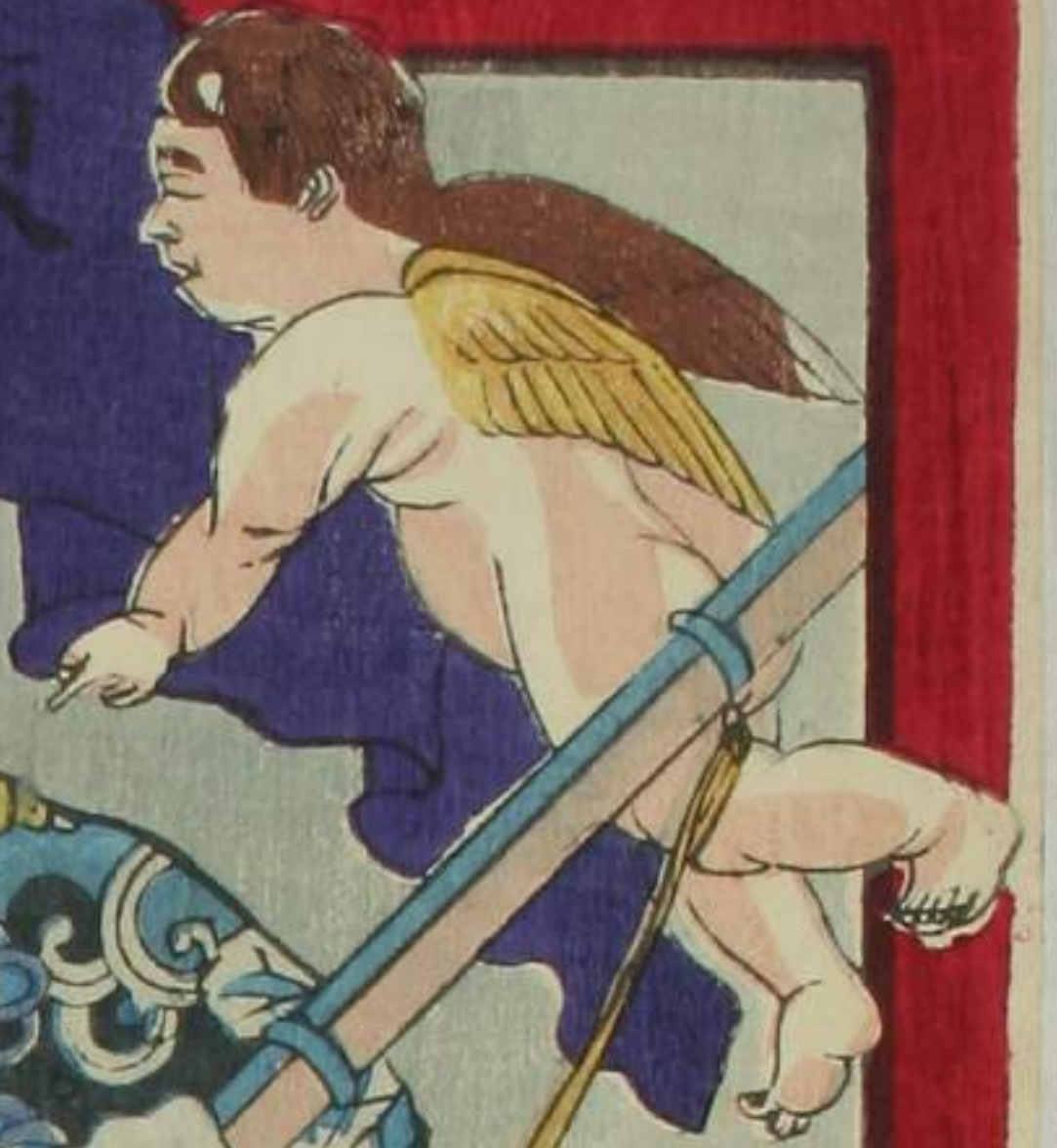




東京日々新聞

八百五十一号



轉々堂主人録

洋酒は閑まき
只獨り飲居子椽か
物音のい桐の葉を小會ねと見え久しく音信ぬ義弟
何某ありたるが此は先頃遠國ありて病死するの報ありし
友愛の情切ありより幻姿と現せし影は千種の
中消虫の音をのりぞ残りけし

秋暑き庭面掃て打水は瀟々草樹の露の玉葉末と傳ふ
音絶て消る疾き光景と見ゆ思へ會者定離と
自ら感ず愁情の鬱と聊の散さんとして
菴子書室
至来ころ

一蕙齋芳幾



野具足屋

ホクエ

